

2章

グローバル時代の進学ガイド

グローバル化の波は想像以上の勢いで日本に押し寄せている。

この章では、そこへ若者を輩出する日本の大学、専門学校の国際化、グローバル化への取り組みを2つのコーナーに分けて掘り下げていく。

「グローバル社会」で必要なスキルを身につける機会は、今や様々な場所で創出されている。

取材文／荒尾貴正（本誌編集デスク）

I 日本の大学は国際化しているか？

外国人の教員や

留学生が少ない日本

文部科学省は昨年の秋、大学の教育改革の現状を把握するために全国調査を実施した。その中の「大学の国際化に向けた取組状況」を見ると、日本の大学がグローバル化に対応するべく様々な改革に取り組んでいる様子がうかがえる。

「外国語教育」は欧米語のほか、中国語や朝鮮語の開設大学数が目立っている。中国語は607校と、英語の719校に次いで多い(図1)。「英語教育に関する取組」も

バラエティに富んでいる。ネイティブ・スピーカー

の活用は88%(719大学中632大学)に達し、目的別クラス、能力別クラスといったクラス編成も7割近い大学で実施されている(図2)。「英語による授業」を実施している大学はいまだ3割には満たないものの、年々増加している(図3、※「英語による授業」には、日本語を併用するものと英語教育を主たる目的とするものは含まない)。また、「国外大学とのダブル・ディグリー」はこのところ急増している(図4および20ページ参照)。

しかしながら、国際的な見地からいえば、日本の大学の国際化は遅れているといわざ

るを得ないようだ。例えば外国人数員比率は、欧米の有力大学が軒並み20%を超えているのに対して、日本の大学の平均は5.1%。留学生比率も、欧米の有力大学が15~30%程度であるのに対して、日本の平均は3.2%に留まっている。

留学が大学の卒業要件になる時代

図5は1975年以降の全世界の留学生数の推移を示している。75年の60万人から06年には290万人へと、この30年間で5倍近く増加している。特に90年以降はベルリン

の壁崩壊によって国際的な流動性が一気に高まり、増加のペースが年々速まっているのが読み取れる。

ハーバード大学は先ごろ、留学または海外での研修経験を卒業要件にする計画を発表した。大学時代に海外で一度も学ばなかった者には卒業資格を与えないというのだ。これからの社会を担う人材にはグローバルな視野が欠かせないという思想がその背景にある。ハーバード大学だけでなく、米国や欧州の主だった大学もすでにそうした認識を持っており、また各国政府も多額の予算をもってそれを後押ししているために国際的な「留学ブーム」が到来している。

図1 学部段階における外国語教育の実施状況

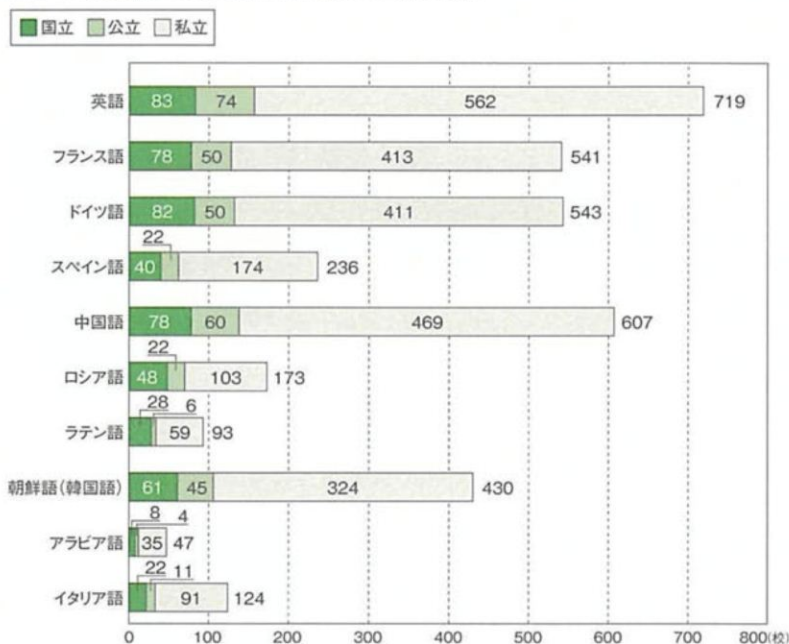


図2 学部段階における英語教育に関する取組の実施状況

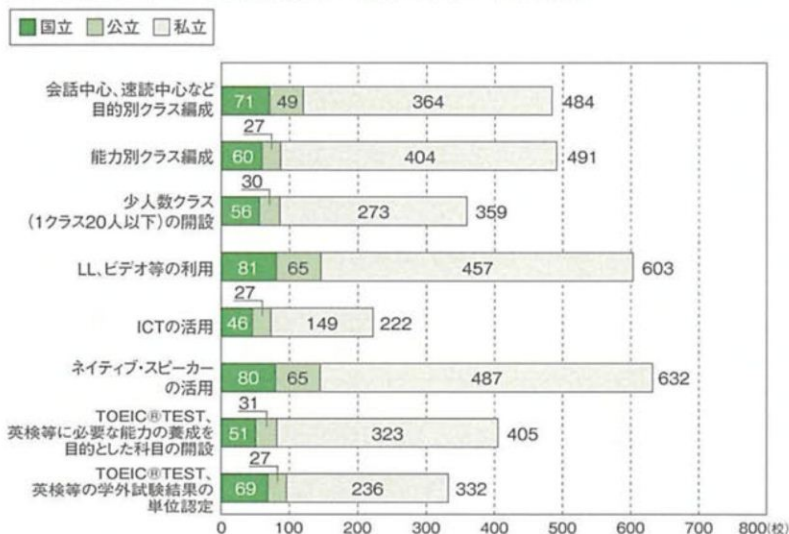


図3 学部段階における「英語による授業」の実施状況



図4 国外大学とのダブル・ディグリーを導入している大学

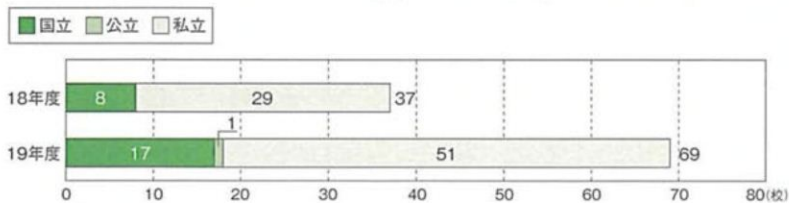


図1～4出典:文部科学省「大学における教育内容等の改革状況調査」(平成20年)

対して日本人の海外留学者数は伸び悩んでいる。ここ数年8万人程度で推移しているが、米国への留学者が年々減少していたり、留学期間が短くなったり、男性が少ないなど(図6)、この世界的潮流の中にあつては低調である。

こうした状況に文部科学省も危機感を抱いている。高等教育局高等教育企画課国際企画室長の氷見谷直紀氏は次のような見解を示す。

「大学の国際競争はすでに始まっていて、今や世界中の大学が優秀な学生を奪い合っている状況です。日本も当然、遅れを取るわけにはいきません。国にとつての人材確保という意味合いもありますが、わが省としては日本の若者一人ひとりの将来のために、ぜひとも国際色豊かな環境で学んでもらいたいと思っています。そのためには積極的に海外に飛び出してほしい、また海外の優秀な学生には日本の大学を選んでほしい。私た

ちはその環境づくりを推進していきたいと考えています」

**英語による授業が
ますます増える見込み**

では、文部科学省はどのような対策を考えているのだろうか。

日本人の海外留学者数が伸び悩んでいる点について、何が障害となっているのかを明

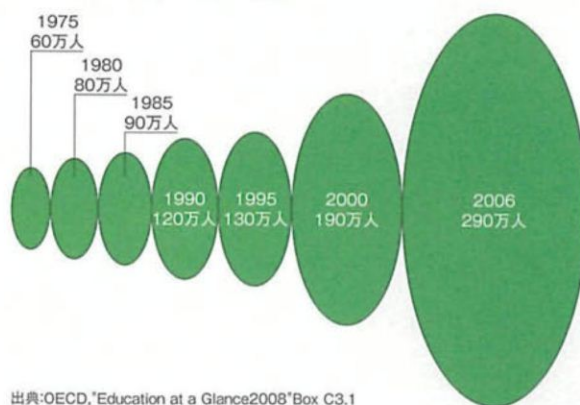
らかにした調査がある。国立87大学を対象にしたその調査によれば、1位は「帰国後、留年する可能性が大きい」、2位は「経済的問題で断念する場合が多い」となっている。

前者については、留学を教育カリキュラムの中に組み込むことを同省は奨励している。海外留学を学部の4年間(5年間程度)の中に最初から位置づけ、留学が単位認定されたり、卒業と同時に2つの大学の学位を得られるようにするということだ。

この形態は国際的にも増えており、日本も図4に示したように、今後ますます増加していくと思われる。後者の経済的問題の対策としては、今年度補正予算から300億円を準備した。今後5年間に15～3万人の若者を海外に派遣するための基金となり、渡航費の援助などがなされるようになる予定だという。

また、世界の優秀な学生を日本に集めるための施策もスタートしている。昨年政府が発表した「留学生30万人計画」の一環として、同省は国際化拠点整備事業（グローバル30）を開始した。国際化の拠点となる大学を30選定し、重点的に育成していく取り組み

図5 世界の留学生数の推移



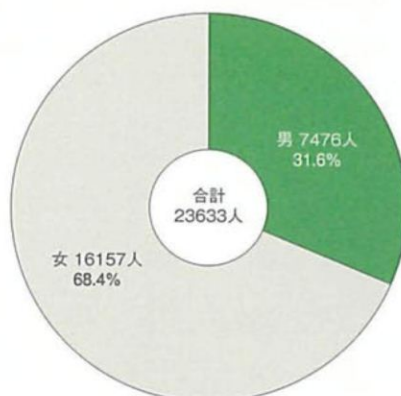
出典:OECD,『Education at a Glance2008』Box C3.1

みで、今回13大学が採択され（図7）、今年度予算として41億円が計上された（各校2～4億円程度）。これらの大学に課せられる取り組みは以下の3つである。

1. 英語による授業等の実施体制の構築
2. 留学生受入れに関する体制の整備
3. 戦略的な国際連携の推進

なかでも右記の1が最も重要だとされ、現在世界の英語圏以外の大学はこの分野でしごきを削り合っている状況だという。日本は図3で示したように、「英語による授業」は増えているものの、「英語による授業のみで卒業できる学部」はきわめて少ない。国際教養大学や立命館アジア太平洋大学

図6 日本人大学生・大学院生の留学状況



出典:日本学生支援機構「平成18年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査」

など5大学6学部しか存在せず、国際的に見て非常に遅れている。右の13大学は、まずはこの分野での充実が望まれており、今後他の日本の大学にも広がっていくことが予想される。

また、3については13大学各々が海外拠点を設置して各校の情報発信をすることにも、内8カ所を「海外大学共同利用事務所」に指定して、日本の大学全体の魅力を発信することも求められている。

「留学生と切磋琢磨する環境の中で国際的に活躍できる高度な人材を養成すること」がグローバル30の目的だというが、日本の高等教育は今、まさしくそういう方向に進

図7 平成21年度国際化拠点整備事業・採択拠点

国立大学	私立大学
東北大学	慶應義塾大学
筑波大学	上智大学
東京大学	明治大学
名古屋大学	早稲田大学
京都大学	同志社大学
大阪大学	立命館大学
九州大学	

もうとしているようだ。

外国人と『協働』し『競争』する時代の進路選択

「国際的に活躍できる」人材を求める背景をいま一度述べるならば、それは社会全体が国際化、グローバル化へと確実に進んでいるためである。今後は日本企業に勤めたとしても、アメリカ人やフランス人、インド人、中国人といった外国人たちと一緒に働くことが当たり前になる。しかもそうした外国人たちの多くはインターナショナルな学びを体験している。

「10年後、20年後には、働く場面において、外国人たちと『協働』したり『競争』する機会が今とは比較にならないくらい増えているでしょう。その点で大学時代に彼ら彼女らと一緒に学んだり、海外で国際的な感覚を身につけておくことは非常に意味があると思います。大学の4年間はあつという間ですから、高校時代からそういう長期的な展望をもって進路選択ができた理想的だと思えますね」（氷見谷室長）

次のコーナーでは、国際化に積極的に取り組んでいる大学と専門学校の例を挙げる。学校選択にあたって参考にしていたただけたら幸いである。

Ⅱ 国際化に積極的な大学・専門学校28

1 グローバルに活躍する職業人を養成

国際派スペシャリストを養成

医師や看護師を養成する大学のなかで、国際化に対応した教育に取り組んでいるのが**東邦大学医学部**だ。地球規模で活躍する医療人の育成を教育目標とするこの学部では、たとえば医学科は選択科目にTOEFL®テストコースやCSAコース(医療英語)を設けて入学時から語学力を養う。また6年次の臨床実習は国内医療機関のみならずアメリカ、イギリスなどの大学附属病院での実習も可能で、海外との人材交流も盛んだ。看護学科では英語は1〜4年まで必修、他に7カ国語を開講するなど医療系の語学教育としてはきわめて充実している。「国際看護学」で諸外国の健康問題についても学ぶなど、国際感覚を身につけた看護師の育成に注力している。

コンピュータエンジニアを養成する教育機関として異彩を放つのが**会津大学**だ。

学生数の3倍ものコンピュータを有したり、高校生対象の「パソコン甲子園」を主催したり、国際的な大学対抗プログラミング大会で優秀な成績を収めるなどユニークかつ先進的な教育で評価を得ているが「国際性」も大きな特色。教員の約4割が外国人で、コンピュータに関する授業の約半数は英語で行われる。英語を「共通語」とする理工系大学は日本では非常に珍しい。

グローバルなクリエイターの養成という点では**デジタルハリウッド大学**が個性的だ。COOL JAPANなどと呼ばれ、世界的に評価される日本のアニメ、マンガ、ゲームといったポップカルチャーを世界へ発信する人材を育てるにあたり、語学力は欠かせない。そんな理念から芸術系大学として例を見ないような英語教育を行っている。講師に多数のネイティブスピーカーを配

し、映像や演劇を多用して話せる英語を習得。留学費用を最大100万円までサポートするシステムなどにより学生の約半数は在学中に留学を実現している。日本の誇る高い技術力に英語のコミュニケーション能力が加われば、ハリウッドなどにある国際的なCG制作会社で働くことも可能だ。

国際協力のプロを養成

アジア太平洋の農林業開発、環境保全などに貢献しているNGOオイスカ・インターナショナルが立ち上げた**オイスカ開発教育専門学校**は、国際協力の専門家を育てる学校。国内外の国際協力機関に就職したり、**青年海外協力隊**に入る卒業生が多い。発展途上国における国際協力の現場の多くが農村であるため、また農業により大自

間の海外研修。電気・ガス・水道のない生活を体験し、国際協力の専門家に必要な構築や農業技術、マネジメント能力などを学ぶという。

国際基督教大学は、国連やNGOなどの国際機関で活躍する卒業生が多い。もともと同大学は、第二次世界大戦への深い反省から生まれた大学である。東京・三鷹のキャンパスには、かつて戦闘機エンジン開発のための研究所があった。その地から武器では

の養成に熱心に取り組んでいる。現代コミュニケーション学部の子供語教員課程が07年に文部科学省の委託事業に採択され、社会人にも受講のチャンスが広がった。10〜70代の立場の違う人々が共に学ぶことで異文化理解が進み、日本語教師として大切なマインドを醸成しやすくなったという。修了生の多くは外国籍児童の学習支援や日系人の就労支援、地域住民同士の交流の場「ほんごカフェ」など、多文化共生社会の最前線で活躍している。

国際派サービス人材を養成

なく、平和をつくる人を送り出したいという願いで大学を創立し、全人教育であるリベラルアーツを推し進めてきた。専攻以外に学生が4年間学ぶ一般教育科目も、人間の相互理解や世界平和の実現、地球市民としての責任の遂行に邁進するための基盤づくりを目標としている。こうした教育ポリシーが卒業生の進路にも影響を及ぼしているようだ。

国際協力や地域の多文化共生において日本語教師の果たす役割は大きい。市の総人口の4%を外国人が占める浜松市は日本語教師のニーズが高く、**浜松学院大学**はそ

日本外国語専門学校はキャビンアテンダントやグラウンドスタッフなど、エアライン業界に毎年1000人を超す卒業生を送り込んでいる。外国語教育やマナー教育に定評のある同校だが、もともと特長的なのは、5週間の集中的な海外研修だ。シドニーの語学学校で3週間の語学研修を受けた後、カンタス航空のトレーニングセンターで2週間の研修。機内実習や避難訓練、エアライン知識などがカンタス航空の教官によって、すべて英語で行われる。この体験が学生の知識も意欲も高めるといふ。

美容師として海外で活躍したい若者のた

めに、**高崎ビューティモード専門学校**は国際美容師学科を開設。3年制のトップスタirisコースは、美容師国家資格に加え「HABIA国際美容ライセンス」という美容技術の国際資格の取得も目指す。海外短期留学制度も導入しており、希望者はイギリスやベルギーなどに渡って語学研修や現地サロンのインターンシップを都合1ヵ月行う。3期生である現在の3年生は全員が留学を希望し、実現した。

ホテルスタッフなどとして観光業界で活躍する卒業生が多い**駿台観光&外語専門学校**は、インターンシップがひとつの強みだ。なかでも海外ホテルのインターンシップは5ヵ月という長期間。ニュージーランド、パラオ、マレーシアなどのホテルでフロントやレストラン、客室などを順々に担当し、世界標準のサービスや語学力、心構えなどを吸収。参加者は学内選考によって選ばれ、このインターンシップの経験者は、就職活動にも自信を持って臨めるようになるという。

国際派ビジネスパーソンを養成

グローバルビジネスの即戦力を養成するために**神田外語学院**が長年の教育ノウハウ

を結集し、06年に開講したのがグローバルコミュニケーション科だ。2年間で語学力、ITスキル、ビジネススキルの習得を目指し、TOEIC®テスト700点を卒業要件とした。1年次から基礎を徹底して学び、2年次の卒業制作はその集大成として3つのスキルをフルに活用するグループワークを行う。08年の課題は「すでに日本にある製品をアメリカ市場に進出させるための企画書を作り、英語でプレゼンテーションを行うこと」だったが、1期生の発表レベルは「すごい高く、その全員が卒業要件もクリアしたという。」

グローバル社会で活躍するために日本人にもっとも必要な力は何か？ **明治大学国際日本学部**の出した答えは「日本についての深い知識と、それを外国人に的確に伝える能力」(同学部長 蟹瀬誠二氏)。同学部は日本の伝統文化と現代文化、ハイテク技術などをしっかり理解し、海外に向けて堂々とアピールしていける人材の輩出を目指している。そのためには日本研究や国際研究のみならず、英語教育の充実も不可欠だ。TOEIC®テスト800点以上を到達目標とし、1年次には週8コマの英語漬けカリキュラムで使える英語を徹底的に習得したり、多様な留学制度も用意されている。

2

国際交流・ボランティアが盛況

アジア5カ国、7大学の 大学生が熱心に討論

アジア各国の大学生が集い、経済問題や環境問題、労働問題などアジア共通の課題を話し合うGAPAC(アジア学生交流会)という活動がある。ソウル国立大学、北京大学といったアジアの有力大学に加え、日本からは**千葉商科大学**、**慶応義塾大学**、**名城大学**が参加。5カ国7大学から100人以上の大学生が集まってチームをつくり、テーマごとにディスカッションを重ねながらチームの考えをまとめ、最後に発表。これらがすべて英語で進行される。

今年は千葉商科大学を会場に8月末に開催。同大学学長の島田晴雄ゼミのゼミ生が、会議に参加するとともに各国学生のホームステイや交通、食事などを調整した。会議は2日間だが、前後にパーティーやスポーツ大会、東京シティアワードも盛り込まれ、一連のイベントを通じて国境を超えた友情が深まったという。

途上国に井戸や 苗木を贈る活動

日本外国語専門学校国際交流科国際ボランティア専攻では、毎年1年生が2週間の海外ボランティア研修を実施。以前ミャンマーを訪れた際、現地での深刻な水不足を知り、帰国後、自主的に水支援のチャリティ・コンサートを企画。収益金でミャンマーに井戸を贈ることができた96年以来、学生主導で毎年チャリティ・イベントを開催。さらに今年には「東京2009アジアユースパラゲームズ」に全学60余名の学生がボランティアスタッフとして参加するなど、活動の場を広げている。

子どもたちが学校などに苗木を植え、育てる活動を通じて自然や緑を大切にする気持ちを養いつつ、地球の緑化を進める「子供の森」計画という国際的プログラムがある。91年からNGOオイスカインターナショナルがスタートさせ、現在26カ国・地域の約4000校が参加、累計600万本以上が

植林された。**オイスカ開発教育専門学校**では2年次後期に海外研修があるが、その際にフィリピンの小中学校で子どもたちと一緒に苗木を植えるなど、このプログラムの実践も行っている。

海外の若者たちとともに ボランティア活動

国際交流事業の草分けである国際教育交換協議会(CIEE)は、毎年春季と夏季に**国際ボランティアプロジェクト**を開催している。世界中から集まる18歳以上の若者たちと、世界約30カ国で2〜3週間ボランティア活動を行うもので、環境保護、城や教会の修繕・修復、海ガメの保護、子どもたちとの交流など、内容は多彩。日本からこのプロジェクトに参加する学生も多く、**関西外国語大学**や**名古屋商科大学**からは毎年数十人単位で大学生が参加している。大学側もこうしたボランティアへの参加を推奨しており、単位として認定している。

教室の知を社会実践する 「サービス・ラーニング」

国際基督教大学はサービス・ラーニングという、「教室の知」と「社会実践」をリンク

させる教育プログラムを展開している。事前講義に出席し、教員のガイダンスのもと活動計画を準備し、国内外のNGOやNPO、公共機関等で30日間以上の奉仕活動を行う。活動後、プレゼンテーションとレポートを提出することで単位を取得。教員や他の学生との対話やジャーナルなど様々な「リフレクション」(ふりかえり)を重視し、それを学びに結び付けている点が同大学のサービス・ラーニングの特徴だという。また、同大学はアジアを中心としたサービス・ラーニングのネットワークを形成しており、これらの大学・機関のプログラムに参加することも可能だ。

3 ユニークな留学制度

「全員留学」を

カリキュラムの柱にする

学生に学びの場だけでなく、気づきの場や実践の場を提供することを重視する**中京大学**は、海外留学も独自のスタイルをもっている。

08年に設置された国際教養学部は、グローバルな教養の修得と2つの外国語の運用能力を養う。2つとは、5つの選択言語（フランス語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、中国語）中の1言語と、英語である。選択言語については、それが用いられている地域への1セメスター（2年次秋学期）の語学留学を全員参加で実施する。出発前に計画書、帰国後は報告書を提出するため、語学修得だけでなく、各国事情をつぶさに観察することも求められる。また、英語についても英語圏への2〜3週間の語学研修やビジネス研修が推奨され、単位化されている。

京都橘大学の英語コミュニケーション学

科も2年次後期（6カ月間）に全員参加の海外留学を実施している。

92年度から希望者に実施してきた6カ月間の留学制度が01年度から必修化された。留学により2つの大きな成果が得られることがわかったからである。ひとつは英語運用能力の向上。学生のTOEFL®テストのスコアを見ると、留学前後で平均して40点以上伸びている。参加者の人間的成長ももうひとつの大きな成果である。各国文化の違いを知り、互いにコミュニケーションを取り、認め合うことの大切さを実感している。

英語コミュニケーション学科は引き続きこの制度を教育の柱としていくが、とりわけ英語教員養成を目指す「英語教育コース」の学生はこの留学の機会に現地の小学校や幼稚園でボランティアに参加することができ、貴重な経験を積めるという。

観光業界などに数多くの卒業生を送り込んでいる**ホスピタリティツーリズム専門学校大阪**は来年度より、昼間部生全員対象の海外体験プログラムを導入する。観

光サービス業を目指すうえで必須となっている「国際感覚」を全学生に養うため、具体的にはホテル科、ブライダル科、旅行科、鉄道サービス科、エアライン科、エアポート科、テーマパーク科、ブランドビジネス科、英語科それぞれがアメリカまたはオーストラリアに1〜2週間滞在し、生活体験や語学研修、業界視察などを体験する。費用は同校の短期留学奨学金基金より出され、学生の自己負担はないという。

「ギャップイヤー」により 自分を再発見する

名古屋商科大学は入学早々の1年次前期（4〜7月）に異文化体験プログラムを導入しているが、この名称をギャップイヤー・プログラムとしている。ギャップイヤーとは、高校卒業後、大学入学までに置く期間や、大学などに籍を置く学生が学業から離れて過ごす期間のことを指す。欧米ではギャップイヤーを過ごす学生が増えており、その間に旅をしたり働いたりしながら自分を見つめ直す。次なる飛躍のための有意義な助走期間として、欧米社会では広く認知されているといわれる。

名古屋商科大学はこのギャップイヤーを意義あるものと考え、05年度よりカリキュラ

ムに組み込んだ。参加者は入学後すぐに各自の海外研修計画書の作成を開始し、英会話指導、生活指導を受けて、4月下旬に出発。現地ツアーで雰囲気慣れた後、ヨーロッパ各地に散って調査やボランティア活動、企業訪問など各自の計画に従って生活する。7月に帰国し、事後研修を受け、報告書を提出して単位認定を受ける。この留学にあたり、大学から1人36万円の資金援助がある。今年度参加した12人の学生は、入学当初より明るく、たくましくなっており、帰ってきたと大学側は見ている。

4 個性的な外国語教育

外国語の恐怖心をなくす

「3対1」の少人数授業

外国語で「議論」ができ、さらに相手を「激励」できる本物の国際人の養成を目指す**名古屋外国語大学**は、ユニークな取り組みを数多く行っている。例えば外国語学部と現代国際学部の全学科すべての学生が受講する「パワーアップチュートリアル」は個性的だ。これは学生3人とネイティブスピーカーの教員1人で行われるきわめて少人数の授業のこと。外国語に対する恐怖心を取り除くために、プレッシャーがかかりにくいとされる「3対1」のスタイルを採用。「世界の今」をテーマに外国語で討論し、外国語で「考え、表現し、理解する」力が身につくことを目指す。また、外国語学部英米語学科では1年生を対象に、**英語学習が1年間で1000時間**に達するよう「1000チャレ・プログラム」を導入。授業時間、宿題の時間、読書時間、留学生と話した時間などを日々記録し、大学に報告。そうして1年間

1000時間を目指し、その勢いで翌年も1000時間、都合2年間2000時間で英語学習を習慣化させ、3年次からの専門的な学習に移行させたい考えだ。

通訳トレーニングで英語力が飛躍的に向上

130余年の英語教育の伝統をもつ**神戸女学院大学**は05年度から全学部学科生を対象に通訳トレーニング法を活用した英語教育プログラムを導入した。

「通訳」には英語力のみならず、日本語表現力や幅広い教養が必要である。また高度な集中力や判断力、思考力も求められる。そうした力は通訳者だけでなく、国際社会での活躍を望むあらゆる学生に有効であるとの考えから、同プログラムは全学導入された。

通訳トレーニングでは、「逐次通訳」と「同時通訳」の手法を学んでいく。例えば同時通訳では、スピーチを聞く→理解する→言語転換する→発する、という作業を連続し

て行う。耳に入る言語を訳しながら、次々と入ってくる言語を把握する作業が同時に必要になるため、リスニング能力に限っても100%の正確さが求められる。同大学ではこのトレーニングのために、パソコンソフトの開発のほか、BBCニュースを学生がいつでも視聴できるようAVライブラリーを開放するなどの体制を整えている。このプログラムは2年生～4年生の3年課程だが、2年次にTOEIC®テスト550点以上の学生のみが参加可能。3年間の履修で、TOEIC®テストのスコアのクラス平均値は800点以上に伸びるという。

多国籍な空間で言語と文化を学ぶ

神戸外国語大学は87年の開学当時から日本ではまだ珍しかった少人数教育を導入している。それをさらに進める形で、個別学習を支援するために**最新鋭の学習設備**を備えている。03年にオープンしたSACLA（サクラ）は英語を学ぶための学習センター。1階のメディアプラザには180台以上のパソコンが常備され、学生が自由に使用できる。2階のラウンジには約60人のネイティブスピーカー教員が常駐。教員と食事やゲームなどをしながら英会話を楽しむことができ

る。また、専任のラーニングアドバイザーに自分の語学学習を相談したり、防音のスピーキングブースで発音練習をするなど、様々な利用法がある。

08年にオープンしたMULC（マルク）は英語以外の多言語学習施設。中国語やスペイン語、韓国語など7つの言語エリアがあり、各々の生活文化を代表する街並みや建物が、現地の資料により忠実に再現されている。各エリアにはネイティブ教員も常駐しており、現地で旅や留学をする感覚で言語と文化を学べるユニークな施設だ。

5

ダブル・ディグリー

4年間で2つの学位を 目指す制度

ダブルディグリー、またはデュアルディグリーと呼ばれる制度は、一般的には国内大学に入学し、そこから海外大学に留学してまた国内大学に戻り、卒業時に国内大学と海外大学の両方の学位を得られる制度のこと。すなわち、双方の大学で単位を認め合うこと(単位互換)がこの制度の前提となっている。

13ページでも示したように、この制度を導入する大学は増えており、その多くは4年間(プラスα)で2つの学位が取れる。国内の大学は国内でその名が知られているが、海外の知名度はあまり期待できない。グローバルな活躍を目指すなら、ダブルディグリーには大きな価値がある。

創価大学は07年度からデュアルディグリーコースを開始した。同大学文学部人間学科に入学し、2年次と3年次の2年間、中国の**北京語言大学**に留学すると、都合4年間

で双方の大学の学士号が取得できる制度だ。1年次9月に学科内の選抜試験により留学生が選ばれ、2年次から北京へ。北京語言大学は外国人のための中国語教育機関として中国最高峰とされ、6万人の留学生を受け入れてきた実績がある。そこで2年間学んだ後、4年次は創価大学に戻って学習するが、卒業論文は北京語言大学の教授が創価大学まで来て口頭試問を行うという。留学先の学費、宿舍費は創価大学が負担する。

白百合女子大学には4年間プラスαで2つの学位取得を目指すデュアルディグリー・プログラムがある。同大学はアメリカの**ベネディクトイン大学**と卒業単位取得に関する協定を結んでおり、同大学卒業後、ベネディクトイン大学で目安として約35単位を修得すれば、ベネディクトイン大学の学位も取得できる。04年ノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイ氏はこの大学の卒業生だ。なお、十分な英語力と、学が分野や目標が明確であることが申請条件になっている。

6

外国大学の日本校

日本に参入している海外の大学のうち、文部科学省より「外国大学の日本校」として指定された大学は、日本の大学院への入学や日本の大学への編入学、単位互換などが認められている。04年の制度改正により、「外国大学の日本校」は正式な高等教育機関として認められるようになったのだ。

海外の教育を そのまま日本で体験

その第二号である**テンプル大学ジャパンキャンパス(TUJ)**は、日本の学生にアメリカンスタイルの教育を提供することを目指して82年に開校した。

授業はすべて英語、春・夏・秋学期の年3回の入学機会、必要単位を取得すればいつでも卒業可能など、アメリカの大学教育そのものを展開。TUJの学生は、アメリカ本校の学生と同じ学位と単位を取得する。どの科目でもプレゼンテーションやディスカッション、グループワークが多用され、学生は授業を通してクリエイティブシンキング(創造的

思考力)やクリティカルシンキング(分析的思考力)を習得していく。また、在日の各国大使館や国際的な団体・企業などでのインターシップも充実。国際化が進む中、外資系企業だけでなく、海外展開する日本企業に就職し、グローバルに活躍する卒業生が多いという。

日本とロシアの経済交流や文化交流は進んできているものの、ロシアに精通した日本人はまだ少ない。そうした問題意識から函館に94年に開校し、06年「外国大学の日本校」に指定されたのが、**ロシア極東国立総合大学函館校**である。

4年制のロシア地域学科を卒業すると、ロシア第2位の教育・研究レベルとされる極東国立総合大学の学士号と、日本の高度専門士の称号が与えられる。教員の多くはウラジオストクの本学から派遣されたロシア人で、ロシア語の修得とともにロシアの歴史、文化、政治、経済を学び、本学での語学実習もカリキュラムに組み込まれている。また英語教育にも力を入れており、卒業までに2カ国語マスターも可能だという。

7 歴史あるグローバルキャンパス

世界中の大学・大学院への 留学が認められる

南山大学は1949年に開学したカトリック系ミッションスクールである。明治末期に来日したドイツ人宣教師ヨゼフ・ライネルス神父が32年に設立した南山中学校(旧制)が南山学園の起源であり、46年に開校した南山外国語専門学校が前身となつて3年後に大学を創設。文学部のみ大学として出発したが、現在は7学部15学科を擁する総合大学となった。

Homini Dignitati(人間の尊厳のために)を教育モットーとし、お互いを理解し、尊重しあう心を育む教育を行っているが、このモットーが南山大学を国際色豊かな大学にしている。

キャンパスでは約25カ国・地域から集まった300人以上の外国人留学生や、50人以上の外国人数員と学び、交流することができる。日本人学生の留学制度は交換留学、推薦留学、認定留学の3種あり、年

間約1000人の学生が留学を実現。海外の協定校は16カ国58大学1団体あるが、協定校ではない世界中すべての大学・大学院の留学も認められ、単位認定されるというユニークな制度もある(認定留学)。LL教室を日本で初めて導入するなど(52年)、当初から英語教育に熱心で、07年度には英語教育センターを開設し、全学部生の英語力向上のためのプログラム開発を行っている。World Plazaという「学内留学」のスペースがあり、留学生たちと会話やゲームを楽しんだり、DVDやCNNを視聴することができる。ただし「日本語禁止」なので、日本語で話したり、日本語の本を読んだり、日本語字幕を見ていると注意されるという。

教養と英語を身につけ 「責任ある地球市民」に

国際基督教大学は1953年の開学以来、入学式において、世界人権宣言に従って大学生活を送ることを約束する誓約書に

新入生全員がサインをする伝統がある。「責任ある地球市民」を育てる大学であることのひとつの証だ。

責任ある地球市民には教養が求められる。同大学は当時日本になかった4年制教養学部大学としてスタートした。欧米ではスタンダードな、学問の専門化を遅らせ文系理系の壁を越えて広く学んだ後に専門を深める教育(リベラルアーツ)を今日に至るまで展開している。

世界の知を学ぶには英語力が必須だ。同大学では、1年次のほとんど2年次の一部を使って集中的に英語を学ぶ。この英語教育プログラム(ELP)は英語で行われる初年次教育でもあり、英語オンリーの多彩な授業を通じて大学での履修に必要な水準の英語運用能力や批判的思考力などを身につける。同時にこの2年間で専門科目の基礎科目などを履修し、自分がどの分野に関心があるのかを見定めて、32分野のなかからメジャー(専修分野)を決定する。

学生のおおよそ10人に1人、教員の3人に1人が外国籍であり、キャンパスは国際的だ。日英を公用語としているため英語開講の専門授業も多く、様々な国籍の学生が隣り合って受講するのはごく自然な光景。寮やサークル活動にも国籍や人種の境界線はない。21カ国約60大学と交換留学協定を結

んでおり、他のプログラムを含めれば約30カ国に留学が可能。1・2年生の夏休みにELPの一環として6週間の海外英語研修プログラムに参加するなど、留学制度を活用する学生は多い。

「言語と平和」を学び 国際ボランティアに参加

1959年に開学した**京都外国語大学**の前身である京都外国語学校は、終戦間もない47年に創立された。その当時、何より求められたのは「世界平和」の実現であり、その

基盤としての「国際理解」であった。創立者の森田二郎・倭文子先生は、国際理解に有効なのは外国語の修得と、その言語圏の文化・社会・経済の理解であると考え、PAX MUNDI PER LINGUAS(言語を通して世界の平和を)を建学の精神に、この学園を開学したのである。

その精神を入学当初から理解してもらうために、「言語と平和」という1年次必修科目を設定。春学期は学長をはじめとする学内の教員や、平和に関する活動を行う外部講師などがリレー講義をし、秋学期は少人数クラスに分かれてグループ課題に取り組む。優秀なグループの研究発表には学長賞が贈られるなど、大学はこの科目に重きを置く。学生の多くも「最も印象に残る科目」としてこれを挙げ、その影響からか、この大学では学生たちによる国際ボランティアや国際交流活動が盛んだ。大学側も支援しており、大学の認定プロジェクトには最高20万円の奨励金が贈られるというシステムもある。

また、海外20カ国47大学と国際交流協定を結び、派遣・認定留学、海外セミナーなど留学制度も多彩。専攻する言語以外にも16言語から学べ、2言語同時学習の授業があるなど、教育プログラムもユニークだ。

中国、米国を経て開花した多国籍キャンパス

1966年に開学した**桜美林大学**の創立者、清水安三はキリスト教の宣教師だった。中国で、貧しい子どもたちに自活して生きる術を教える学校を21年に開設。敗戦後に帰国し、「教育の本質は愛」という信念を持つて46年、桜美林学園を創設した。「桜美林」という名称は、留学したアメリカオベリン大学にちなんだもの。黒人を最初に受け入れ、女性への門戸を最初に開いた大学として知られる同校の精神が、桜美林学園創設に深く影響を及ぼしている。

このように成り立ちそのものが国際色豊かな桜美林大学は、キャンパスにも多国籍ムードがあふれている。留学生は英語圏、アジア圏など約20カ国から500人を超え、外国人教員も多い。また、海外留学については世界23カ国90校と提携を結んでいる。長期留学プログラムのほか、語学研修、国際協力研修、海外企業研修など短期研修プログラムも充実していて、毎年400人以上が留学している。18言語を学べるなど外国語教育に力を入れているが、なかでも英語は1年次に「ELP」というプログラムで集中的に学ぶ。ネイティブスピーカーとバイリンガルテ

ィチャーによる1コマ90分、週4コマの授業はすべて英語で進められ、英語の実践的なコミュニケーション能力が身につく。

5大陸をネットワークするグローバルキャンパス

1966年に開学した**関西外国語大学**は、45年に創立された谷本英学院がルーツである。創立者である谷本昇多加子先生は日本復興と世界平和への願いを外国語教育に託し、同学院を20余年で大学にまで発展させた。

国際交流の歴史は古く、68年のアメリカ・アーカンソー大学との交流を皮切りに、「世界中から集まる留学生と関西外大の学生が、夢や人生を語り合えるキャンパスにした」という創立者の思い一筋に国際交流を推進してきた。現在、単位互換提携校は、50カ国地域325大学。アメリカを中心に毎年700人の留学生を受け入れている。留学生が在籍する留学生別科は国際レベルの大学教育を英語で行っており、海外で評価が高い。ここで日本人学生が学ぶこともできる。

同大学から海外留学する学生は年間約1600人におよぶ。4〜22週間の短期留学、1〜3年の長期留学と大きく2つの留

学プログラムがあり、語学研修、推薦留学、交換留学、学位留学など種類も多彩。卒業までに約半数の学生が留学を体験するという。今年3月、同大学が中心となり「ASEAN+3」大学コンソーシアムを調印。次世代のアジアを担う国際人を養成するために同大学と中国、韓国、さらにASEAN10カ国の大学が積極的に相互交流を進めるという日本初の大学国際コンソーシアムだ。個々の大学が英語による授業を充実させ、デュアルディグリー取得を促進し、アジアの大学生の活性化を目指すもので、今秋より相互派遣がスタートする。